

未来へうけつごう 日本のきれいな水

暑い夏、八月は一年で水の使用量がもつとも増える月です。その最初の一日（八月一日）は「水の日」、八月一日～七日は「水の週間」と定められており、水の日・水の週間には、水の貴重さや大切さを考えるための様々な行事が行われます。今年度は特にオンラインでの展開に力を入れ、新たなイベントも開催されました。その一部をご紹介します。



ポスターには、2021ミス日本水の天^{みねもか}使・嶺百花さんと、昨年に続きポケットモンスターのシャワーズが登場！

今年のキャッチフレーズは、「未来へうけつごう 日本のきれいな水」です。



水とのふれあい フォトコンテスト

「水とのふれあいフォトコンテスト」は、「水とのふれあい」をテーマとした写真作品を通じて、水資源の有限性や水の貴重さ、水資源開発の重要性を訴える「水の日・水の週間」の「顔」ともいえる行事です。グランプリ、優秀賞、特別賞、特選、入選、佳作、計30点に賞が与えられます。平成28年度からはSNS版もスタートし、よりご参加しやすいようになっています。

P22・P23にて今年度の入賞作品を紹介しておりますので、ぜひご覧ください。



水を考えるつどい

8月2日、水の日^{みづのひ}の記念行事として「水を考えるつどい」が開催されました。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、参加人数を制限しての実施となりました。

当日は、全日本中学生水の作文コンクールのWEBでの受賞者表彰式や、アルピニストの野口健さんによる講演、「世界の水から日本の水を考える」と題したパネルディスカッションが行われました。



基調講演
エベレストから見た
地球のこれから

アルピニスト 野口 健氏

パネルディスカッション
世界の水から
日本の水を考える



シリーズ 「水の恵み」

ミス日本水の天使の嶺百花さんが、水に関する施設を訪れ紹介する動画シリーズ。第一弾は、群馬県と埼玉県にまたがる下久保ダムを訪れました。第二弾以降も予定されていますのでお楽しみに！



ミズウツリ

国土交通省のYouTubeチャンネルから
ご覧いただけます。



ミズウツリ

第43回全日本中学生
水の作文コンクール

最優秀賞受賞者の作文朗読

最優秀賞受賞者：宮崎県

延岡市立恒富中学校3年 永谷和希さん

全日本中学生 水の作文コンクール

中学生を対象に、「水について考える」をテーマとし開催している作文コンクール。P16・P17で今年度の最優秀賞と水資源機構理事長賞の作品をご紹介します。



水のオンライン ミュージアム

子どもたちに水の重要性や水循環について理解と関心を深めてもらうための、初のオンラインイベント「水の循環とわたしたち～水のミュージアムオンライン」を開催しました。このイベントでは、動画や漫画を通して水について学んでもらい、クイズに解答すると抽選で景品が当たるキャンペーンを実施しました。



内閣総理大臣賞（最優秀賞）

私の夢と大切な水

宮崎県 延岡市立恒富中学校三年 永谷 和希

私は将来、和牛繁殖農家になろうと思っ
ています。繁殖農家の仕事は母牛の世話をして、良い
子牛を産ませ市場に出荷することだ。良い和牛
を育て、和牛のオリンピックに出場すること、
品評会に参加して良い成績を取ることも私の夢
である。私がこの様に考えるのは、祖父の影響
が大きい。私の家は、稲作と和牛の繁殖農家を
していて、現在も五頭の母牛と三頭の子牛を飼
育している。私自身も幼いころから祖父の手伝
いをしてきた。祖父の育てた子牛は百万円以上
の値をつけたこともあり、いつか祖父を超える
繁殖農家になることが私の目標である。良い牛
を育てるために大切なものは、日々の餌やり、手
入れ、良い健康状態を保つことだと思っ
ている。私の家では、地下四十三メートルから地下
水を引き、除去装置を使つてろ過した軟水
を、家族も牛も飲んでる。この水と、それを利用
して育てた米や野菜のお陰か、私自身も大変健
康で、小学校・中学校を通して、無遅刻、無欠
席で過ごしている。人間同様、牛にとつても、
良い水と安全な餌が大切なことは言うまでもな
い。特に、牛はしゃべることができないから、
人間が良い水と餌を選んで与えることが大切に

なってくる。牛の餌は牧草と稲わらだ。稲わら
は、もちろん田植えをして米を育て、収穫した
後のわらである。米や牧草を育てるためにも、
安全な水は欠かせない。また、日光や雨も農業
にとつては必要不可欠のものである。まさに水
は植物・動物の命の源だと思っ
ている。水の循環について学び、調べてみると、地球
上の水の総量は、およそ四億年前からはほと
んど変わっていないという。日本は豊かな水資
源に恵まれていて、蛇口を開けば安全な水が出
てくるのが当たり前だが、これは決して世界
の常識ではないことを忘れてはいけない。日本
人は飲食・入浴・洗濯・水洗トイレなどで、一
人当たり一日約二百九十リットルもの水を使っ
ているそうである。その一方で、世界では約七
億人の人々が生きていくために必要最低限の三
リットルの水すら手に入らず苦しんでいるとい
う。さらに調べると、実は、日本は国土が狭く
人口が多いため、国民一人当たりの水資源量は
世界平均の二分の一程度しかなかった。この現
実をしっかりと受け止め、私たちは、水の大切さ
をもう一度考え直さなければならぬ。無駄を
はぶく意識もしっかり持つて生活しなければい

けないと思っ
た。私たちが使った水が循環し、世
界のどこかの人のための水になると思っ
ると、水をきれいな状態で循環させることも考えなけれ
ばいけないだろう。

私の通う学校では、通学中のごみ拾い運動を
行っている。小さな活動だが、もし日本の中
学生がこの活動をして、一人一つのごみを拾う
だけでも、一日約三百二十二万個のごみがなく
なることになる。毎日行えば、その三百六十五
倍だ。小さな活動も、決して小さなことではな
くなく思っ
ている。歯磨きの時に水を流しっぱなし
にしないことも同じだろう。日本中の家庭が、
生活用水の節水を行ったり、生活排水を少しし
ても減らし、きれいにする努力を行ったりするこ
との大切さをあらためて考えさせられる。今、
プラスチック製品の減量が進められ、私たち中
学生でも買い物にマイバックを持参するようにな
った。水を守るためには、水だけでなく、空
気や土壌も守らなければならない。それは、自
然環境のすべてが連鎖しているからだ。

和牛繁殖農家になるという夢の実現のため
にも、私は環境問題に興味を持ち続け、水を守る
ために自分にできる小さなことをやり続けよう
と思っ
ている。将来、私が育てる牛も、おし
い井戸水で健康に育つてほしい。五年に一度の
和牛オリンピックで、前回は鹿児島県に総合優
勝を奪われたが、「宮崎牛」がずっと日本一を
守り続けられるように頑張りたい。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

四国四県、友情の水

香川県 香川大学教育学部附属高松中学校三年 溝口 真央

夕方放送される地方のニュース番組でも、今
年は連日コロナ関連の報道が中心だ。しかし、
私の住む香川県では例年この時期には、天気
予報とセットで「早明浦ダムの貯水率」のニュー
スが毎日伝えられていた。

これ以上貯水率が下がれば、取水制限をし
なければならぬと報道されるほど、ダムの水
が枯渇した年もあった。ホームセンターに行け
ば、濁水対策として、蛇口につける節水グッズ
や雨水の利用商品が陳列されており、市役所
の入口には「節水にご協力ください」という横
断幕まであった。香川県の水不足は、ここ数年
で急におきはじめたものではなく、香川県民
の水との戦いははるか昔から続いている。

日本で一番面積が小さい香川県は、ため池が
一万二千以上あり日本で三番目に多い。温暖
な瀬戸内海気候は年間の降水量がとも少な
く、地理的にも大きな河川がないため、慢
性的な水不足にみまわれてきた。この深刻な
水不足をどうにか解消しようと、昔の人は県
内各地にため池を築き水の確保に力を注いで
きた。それでも、水不足に陥ったときは、神頼
みをするしかなかった。讃岐の国司を務めてい
た菅原道真公が、民の苦しむ姿をみて、自ら

身を捧げて祈願したところ、待望の雨が三日
三晩降り続いたというのは有名な話である。
慈雨に喜ぶ民は、その歓喜と道真公への感謝
を踊りで示した。その雨乞いの念仏踊りが今
もなお、五穀豊穡を祈願するものとして、地
元の滝宮天満宮で受け継がれている。

もちろん、雨乞いだけに頼ってきたわけでは
ない。土木の技術を集結して、雨が多く降る
他県から水をひいてくる香川用水を建設し
た。田植えの時期になると、「こうこう」と音をた
てて流れる水を怖いとさえ思っ
ることがある。その水は、はるかかなた高知県の早明浦ダム
から流れ出て、吉野川を下り、讃岐山脈を貫
くトンネルを通り、はるばる香川まで運ばれ
てきている。そして、私たちの生活に欠かせな
い、水道用水・工業用水・農業用水として日々
使われている。香川用水についていろいろと調べ
ると「讃岐の大動脈」と言われる理由に気が
かされた。

祖父が行う米作りでは、五月から九月にか
けて集中的に多くの水を使用している。五月
の連休前には、田植えの準備のために代かき
を行うが、その際は田んぼ一面になみなみと水
が張られる。香川用水から分かれた水路に水

を引き込み、田んぼとの境に祖父が手作りし
たせき板を差し込むと、水は勢いよく田んぼ
の中へと流れていく。まだ小さかった頃、祖父
について田んぼに行き、せき止められた水路に
裸足で入り、膝下まで流れる冷たい水を弟と
かけあつて遊んだことを鮮明に覚えている。祖
父の田んぼに水がたまると、弟と二人で協力
してその栓を外し、お隣さんの田んぼに水が
流れていくようにしていた。上流の田んぼから
だんだんと下流の田んぼへ、効率よく水をまわ
していくことで、水を無駄にしない工夫がされ
ていた。すぐに田んぼに水を引ける有難さ、偉
人の技術のすばらしさ、そしてなにより水の
大切さを実感した。

私たちがあたりまえに食べている米や野菜
の成長には水が必要不可欠である。水がなけ
れば食卓まで届くことはない。蛇口をひねれ
ば水はいつでもいくらでも出てくるので、私た
ちは水を使い放題のように錯覚しているが、水
は枯渇する可能性がある。水も「限りある大
切な資源」であることを意識して生活したい。
なにより、香川用水に流れる水は、周りの県か
ら分けていただいた「友情の水」である。「一滴も
無駄にすることなく大切に活用していかなく
てはならないと感じた。食卓に差し込んでく
る夕日を見て祖母が「明日も晴れやなあ」と
言う。祖父は少し残念そうに「空梅雨やな」と
言う。そんな日常を見て、今年にはコロナの影
響で手伝えなかった田植えを来年は手伝おう
かなと思っ
た。

「第43回全日本中学生水の作文コンクール」で表彰された方々については、
国土交通省ウェブサイトでご覧になれます。

https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizei/tochimizushigen_mizei_tk1_000010.html



17